

ながら感心した。

こゝでは、ミニコンピューターによるグリッド形式のマッピングを研究している一方、地理的情報システム（C・G・I・S）で有名な国土庁と協力してポリゴナルなマッピングシステムを開発中であった。

C・G・I・Sは、すでに農業開発を中心とするいろいろな土地利用計画に使われているが、訪ねていくと訪問者が多いとみえて、テレビにすでに、ドラムスキャナーやデジタイザーを主とするマッピングシステムの解説がとってあった。

オタワは、落ち着いたきれいな町で紅葉がとてもきれいであった。カナダの家庭に招待されるなどの思い出を残してオタワを立ち、森林連続調査法（C・F・I）で有名なクニア教授を訪ねるべく、シラキューズへと向った。

## 樹高測定からの解放

筑波大学 堀田雄次

森林調査に際して、一番不安を感じるのが樹高の測定である。特に広葉樹林や平均20mを越す林分の調査に入った場合、ブルーメライズなどの近代的測高器を用いて測定しても「そんなにあるか?」、「もっとあるだろう?」の一言で、計測結果に自信が持てなくなることをよく経験する。研究・試験などの調査では時間的なゆとりもあり、繰返し測定を行うことによって納得のゆく測定値を得られるが、実務的に測高をしなければならない収穫調査の場合は、輪尺手を追いかけてながら目測をしなければ間に合わないため、野帳手の心理的負担は非常に大きくなる。

測高を必要とするのは、多くの場合林分材積を求めるためであり、もし測高を行わずに材積を求めることが出来れば測定の能率はあがり、何よりも大きいのは、測樹上最も苦手とする測高から解放されるメリットである。

測樹や經理の著書に引用されるタリフとかアルガン表は、正にこの目的に合致した材積表ということが出来る。これまでわが国では、森林の地形の複雑さのため地位が直感的につかみにくく、積極的に地位別材積表を作成する動きはなかった。

しかし最近国有林では営林局別に樹種ごとの地位指数が設定され、森林調査簿

の小班ごとに指数が記入されるようになった。もし、この地位指数に応じた材積表を作成することができるならば、樹木や林分の材積調査は、あの苦渋に満ちた測高から解放されるはずであり、この材積表を輪尺にセットするなり Volume Fork の様に機能的に組込むことが出来るならば、材積調査の能率は飛躍的に増大するであろう。

以上のような想定で 2 年程前から地位別材積表を作成するため既存のデータをさがしたのであるが、適切なデータを見付けることが出来なかった。そこで国有林の二変数材積表作成のために用いられたデータを一部林試から借用して、地位別材積表作成に必要なモデルの検討をおこなっている段階であり、その結果についてはまともな次第発表を行う予定である。

最後に紙面を借りて、当大学の様子を簡単に報告させていただく。目下移転の最終段階で、筑波の方の建設のおくれからテンヤワンヤの状態、完全な姿で研究教育が開始出来るのは、早くて昭和 54 年の夏休み頃になりそうである。

(昭和 53 年 1 月 31 日)